

2024年度

国 語

2024年2月13日実施
獣医学部 動物資源科学科，生物環境科学科

受験番号		氏 名	
------	--	-----	--

【注 意 事 項】

1. 試験監督による解答始めの指示があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は60分です。
3. この問題冊子は1ページから31ページまであります。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の所定欄に記入下さい。
5. 解答は所定欄に濃くはっきりとマーク下さい。その際，ボールペン・サインペン・万年筆等は使用してはならない。その他マークの仕方に関しては，解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。
6. 試験監督の指示により，解答用紙(マークシート)に氏名(フリガナ)および受験番号を記入し，さらに受験番号および志望学科をマーク下さい。
7. 試験監督の指示により，問題冊子にも受験番号および氏名を記入下さい。
8. 解答用紙(マークシート)は折り曲げたり，メモやチェック等で汚したりしないように注意下さい。
9. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は，手を高く挙げて試験監督に知らせ下さい。
10. 試験終了後，問題冊子と解答用紙(マークシート)はともに机上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

生肉を放置すれば数時間から半日で腐敗する。だから冷蔵庫のない時代、長距離航海には、食用動物を生かしたまま載せていったという。肉を運ぶにはこの方法が有効だからだ。

人の体も死を迎えたときから腐敗が始まる。しかし生きていれば、何も飲食しなくてもかなりの間、肉体を維持できる。⁽¹⁾代謝をしているからだ。

代謝とは、生物体内で制御された多様な化学反応をまとめて指す言葉だ。一つの細胞の中でも数百種類の化学反応が並行して進んでいる。だから代謝の反応式を線でつなげると網のようになる。この網の重要なところは、どこかが切れても迂回^{うかい}できることが多いから物質の循環も確保され、特定の物質が溜まりにくいことだ。

代謝は、電子顕微鏡でも見えない分子レベルで、酸化などで劣化する体の部品としての有機物を新しいものに交換している。これで傷みやすい体を維持しているのだ。さらに外部から侵入してくる病原体を撃退する免疫系の仕組みもある。ただし代謝では、体内に取り込んだ高エネルギー物質の化学エネルギーを利用する際に熱が出る。運動した直後に体が熱くなるのはそのためである。そこで体温などを一定にする恒常性^{ホメオスタシス}の機能がある。ホメオスタシスも免疫系も代謝が支えている。

このように人の体の内部は変わらないようにできている。これは体を長く維持するために都合がいいからだ。このことは地球環境の持続可能性を考えると参考にすべきである。

地球の化学的側面では、豊富な水がAとして働いていることが重要だ。生物ぬきで考えても、水は加熱されれば水蒸気になって大気中を浮遊し、冷やされれば液体の水に戻り、多くのモノを溶かして化学反応の場を提供し、地表近くを流れる。まるで「ゆく河の流れは絶えずして、されどもとの水にあらず」『方丈記』の冒頭より）の言葉のようである。

生物が合成する有機物の化学反応でも水は特に重要である。反応の場を提供するのみならず、生体触媒とも言われる酵素の活性維持にコウ⁽²⁾ケンしたり、脱水縮合や加水分解ではそれらの反応に参加したりしている。そもそも水がなければ生物の代謝は止まってしまうのだ。

このように地球が、多様な生物を抱え、全体として維持できているのは、さまざまな物質が循環しているからである。これは太陽からBな距離にあり、適度なエネルギーが常に供給されているから可能なのだ。現在の地球環境は、これまでの生物の活動や進化までも含めた偶然が積み重なり、時間をかけてようやく達成された定常状態である。この状態は人類が出現するよりもかなり前から達成されていたことから、あらゆ

る生物の循環が重要だとわかる。それは X レジリエンス 生態系に回復力があるからである。私たちには生態系サービスを受けられる恩恵もある。地球でさまざまな化学反応が起こり、各種の元素が物質の姿を変えては循環して、全体として維持されていることは、生物の特徴の「代謝をして体を維持すること」に相当する。地球は子を産まないが、子を産むことを卒業した高齢の人も、脈拍（心拍）や呼吸などのバイタルサインで生きていると診断されるから、地球も生きていると捉えてもいいと思っている。

地球が誕生したのは約四五億年前で、あと約五五億年の余命がある（別の推定もある）という。ただし有為無常である。現在の状態であり続けることはない。あらゆる物質は時間とともに変化していくという自然の（①）セツリ、すなわち熱力学第二法則（別名…エントロピー増大の法則）があるからだ。地球も加齢で劣化（老化）していくのだ。ただし劣化しつつある地球にいつまで人間が生きられるかはわからないのである。

環境という概念は誰かが作ったもので、良い環境とは人が生きやすい環境のことだ。地球の外にも環境という言葉を使うことはあるが、それは人が生きられる環境からどれだけ異なっているかを表現するときに限られる。金星が灼熱地獄であるとか言われるのはその例だ。（②）地球以外

の星の温度が変化してもその星の名を冠してX星環境問題などと言われることはない。言われるとすれば私たちの子孫がそのX星への移住を考えはじめる未来のいつかだろう。

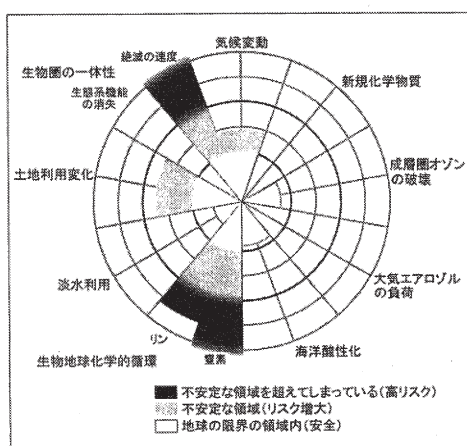
a 環境問題は人の都合の問題だ。宇宙全体からすれば地球環境問題など問題ですらない。かつての文明が減びるとき、生き残った人はその都市を捨て、他所で別の新しい文明を築いたが、私たちはまだ地球を捨てられない。住める星は今のところ地球だけだから、今は解決に向けて努力する選択しかないのだ。

ここで現在の地球の健康診断の結果を確認しておこう。二〇一五年に発表されたプラネタリー・バウンダリーを示したものである【図】。

この図からわかるように、Y、気候変動と土地利用変化がリスク増大状態である。この状態にまで至った原因は、人類が為してきた生産活動や戦争という社会的、意識的な行動によるものだから、その内容はコントロール可能だと言われている。しかしそのように考えて改めれば済むこ

となのだろうか。

例えば、私たちは楽しむために酒を飲む。飲みすぎればアルコール性脂肪肝になるが、これは断酒すれば治る。しかしさらに飲み続ければ肝



図

硬変になり、これは治ることはない。その先には肝がんへの運命が待ち受けている。⁽³⁾ 脂肪肝の状態から肝硬変に移行するときの予測はできない。あとのぐらい飲んだら治らない肝硬変になるのかは事前にはわからないのだ。

一方、気候変動についても、人為起源の変化があるレベルを超えると気候システムにしばしば不可逆性を伴うような大規模変化が生じる可能性がある」と指摘されている。その時点をティッピング・ポイントと言う。実は、地球がいつティッピング・ポイントに達するかはわからない。はっきり言えることは、いま私たちが地球環境問題を解消するための努力を怠ると、地球がティッピング・ポイントを早く迎えてしまうということだ。そして不可逆性の変化が起これば、元には戻せないということである。

地球の健康な状態とは、現在の定常状態が続く可能性が十分に高い状態である。実は環境の本質はこの定常状態にある。残念ながら人類は、さまざまな科学技術を活用し、住みやすい環境をつくってきた一方で、地球を変える働きもしてきた。それは産業革命ごろから大量の化石燃料を用いて、さまざまな形で地球に負荷をかけてきたことが象徴的だが、⁽⁴⁾ これはその一面にすぎない。

環境容量の指標にエコロジカル・フットプリントがある。これは人間活動が環境に与える負荷を、資源の再生産および廃棄物の浄化に必要な面積として示した数値だ。これが、一九八〇年ごろにバイオキャパシティを超過したオーバーシュート状態になったとされている。この状態は一時的ならば地球は回復力とも言える緩衝力を持つので気づかないが、超過分は少しでも確実に滞留しツケとなる。

このツケの代表格がCO₂などの温暖化ガスだ。化石燃料を使えば放出されるCO₂は増える。しかし大気中のCO₂濃度測定値の増加はわずかで、周期的に見られる変動幅に⁽⁵⁾ カク^レれがちだから、中・長期的に見なければわかりづらかった。だが熱を外へ逃がす現象は少しずつだが確実に抑制された。温度が上がれば水や氷に溶けていたCO₂は溶けきれなくなり、地表水の蒸発も促進され、大気中の水蒸気濃度（絶対湿度）も上がる。水蒸気濃度は人為的にコントロールできないのであまり議論されないが、温室効果があるので、地表の温度がさらに上がることになってしまう。

私たちの体は熱くなると汗をかくなど、体温を一定にするホメオスタシスの機能があるので、熱中症などにはなりにくい。頭寒足熱とも言われるように、頭のなかの脳は高温を避けるべきなので、鼻腔の奥には脳とつながっている毛細血管が通っており、呼吸で冷たい空気を通過させて脳を冷却するしくみが備わっている。マスクをしていたり、鼻が詰まっていたりすると頭が冴えない感じがするのは、脳が十分に冷却されていないからである。

地球が抱える最も大きな問題の一つは、熱を外へ逃がす機能が、増加した温暖化ガスによって抑制されていることである。余分な熱を積極的

に宇宙へ逃がす方法がないのだ。冷蔵庫やクーラーは局所的に低温空間をつくるが、地球全体の温度を少し上げてしまう。山火事、大規模な戦争などでも地球の温度は上がる。新型コロナウイルス感染症予防のために、公共交通車内の冷暖房をしつつも窓開けが推奨されてきたが、これも地球をより熱くしたはずだ。今日まで大事に至らなかったのは、同時に経済活動全体が抑制され、相殺されたためである。

このように(5) 現在の地球は、まさに熱中症の兆候が出始めた状態にあるのである。

（浅賀宏昭「人新世における地球と人類の共生」（岩野卓司・丸川哲史編『野生の教養』所収）法政大学出版社）

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

b 暖房の使用、

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

 ～

3

。

(ア) コウケン

1

- ① ケン アクな雰囲気になる。
- ② 調査官をハケンする。
- ③ ケン ショウに当選する。
- ④ 質素ケンヤクを旨とする。
- ⑤ ケン シンの的に看護する。

(イ) セツリ

2

- ① セツ ソクに事を運ぶ。
- ② 栄養分をセツ シュする。
- ③ セツ チュウ案を採用する。
- ④ 余計なおセツ カイだ。
- ⑤ 駅舎のセツ ケイをする。

(ウ) カクレ

3

- ① 演奏のヨインにひたる。
- ② イン ウツな気持ちになる。
- ③ 犯人をイン トクする。
- ④ 契約書にオウインする。
- ⑤ 道のフクインが減少する。

問 2 空欄 A・B を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答番号は 4・5。

- | | | | | | | |
|---|---|------|------|------|------|------|
| A | 4 | ① 一体 | ② 本体 | ③ 媒体 | ④ 客体 | ⑤ 実体 |
| B | 5 | ① 巧妙 | ② 神妙 | ③ 絶妙 | ④ 奇妙 | ⑤ 軽妙 |

問 3 空欄 a・b を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答番号は 6・7。

- | | | | | | | |
|---|---|--------|--------|--------|--------|---------|
| a | 6 | ① さりとて | ② 一方で | ③ ひいては | ④ しかし | ⑤ このように |
| b | 7 | ① たとえ | ② なぜなら | ③ 総じて | ④ すなわち | ⑤ もちろん |

問 4 傍線部（1）「代謝をしているからだ」とあるが、ここでの代謝に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 生物と環境を一体のものとして維持するために不可欠な複雑な化学反応を指し、そこにはエントロピー増大の法則が典型的に現れる。
- ② 酸化などにより劣化した体内の有機物を新しいものに交換する作用であり、生体のホメオスタシスを維持するために必要なものである。
- ③ 体内に取り込んだ高エネルギー物質を利用することによって一つの生物を全体として維持する、周期的な変動をともなう作用である。
- ④ 一つの生体の内部で網の目のように張りめぐらされた化学反応の総称であり、体内の化学エネルギーを定常状態に保つ効果がある。
- ⑤ 水を利用して有機物を合成することを通して、一つのシステムの全体性を維持する働きであり、地球環境の維持と回復にもかかわる。

問 5 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① 多様な生物間の網のような縦横のつながりから成る
- ② 地球を多種多様な生物が住むことのできる場になっている

- ③ 生物の代謝を支える水と有機物を提供する場である
- ④ 有機的なシステムを維持し人類の生存と発展に寄与する
- ⑤ 外部から侵入する者に対して対抗するために存在する

問 6 傍線部（2）「地球以外の星の温度が変化してもその星の名を冠してX星環境問題などと言われることはない」とあるが、それはなぜか。

その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① 環境問題はあくまでも人の都合にもとづく問題であり、地球の環境問題を解決することのできない現状において、地球以外のX星の環境問題について人が考えるようなことはあり得ないから。
- ② 環境という概念は、人が生きられるかどうかという問題が起こってはじめて意味をもつようになるので、そのような問題が起こるはずのないX星では、意味をもつことはまずないから。
- ③ 地球環境問題は依然として深刻な状況にあり、それにもかかわらず人は地球にしか住むことができないので、地球外のX星の環境問題を取り上げることなど時期尚早であるから。
- ④ 環境とは人の存在を前提として、その良し悪しを問題にする概念であり、したがって、地球の外にあって人の存在しないX星について、その概念を当てはめるようなことは基本的でないから。
- ⑤ 環境という言葉は本来、人がそこに住むことを前提にして成立するものであるから、人の住まない地球外のX星の環境を問題にすることはあっても、当事者になることはできないから。

問 7 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① 成層圏オゾンの破壊と大気エアロゾルの負荷の低リスク状態は、以前に比べるとかなり低く
- ② 生物地球化学的循環の各項目の中で、窒素とリンは同程度の高リスク状態となっており
- ③ 地球の限界の領域内にとどまっているのは、淡水利用と生態系機能の消失くらいなもので

- ④ 生物圏の一体性（絶滅の速度）と、生物地球化学的循環（窒素とリン）が、高リスク状態で
- ⑤ 新規化学物質と大気エアロゾルの負荷においては、特に目立ったリスクは発生しておらず

問 8 傍線部（3）「脂肪肝の状態から肝硬変に移行する」とあるが、肝硬変は何をたとえたものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 気候変動におけるティッピング・ポイント
- ② 人間の怠惰によって生じる健康上の問題
- ③ 予測することが困難な地球環境の変動
- ④ 科学技術によって作り出される定常状態
- ⑤ 地球環境に発生した原状回復ができない問題

問 9 傍線部（4）「これはその一面にすぎない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 科学技術が地球に負荷をかけるのは確かであるが、その反面、私たちが住みやすい環境をつくってきたのも事実だということ。
- ② 化石燃料の消費によって起こる問題は、産業革命以降の環境破壊を象徴しているが、他にもさまざまな問題があるということ。
- ③ 産業革命のころから続いていた地球環境問題の一つとして、大量の化石燃料の消費が引き起こした問題があるということ。
- ④ 大量の化石燃料を消費することによって起こる地球環境問題は、人類が地球に負荷をかけてきたことを象徴しているということ。
- ⑤ 人類は産業革命の時代から地球に負荷をかけ続けてきたが、それは科学技術による地球の改変の一部でしかないということ。

問 10 傍線部（5）「現在の地球は、まさに熱中症の兆候が出始めた状態にある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

① 現在の地球は、増加した温暖化ガスによって熱を外に逃がすことが困難になってきており、人間の活動をいくら抑制しても熱はたまり続けホメオスタシスが失われるという、熱中症に似たような現象が見られるようになっていくということ。

② 現在の地球は、CO₂などの温暖化ガスの影響により熱を外に逃がす機能が抑制されるようになったことが原因となって、全体的に地表の温度が上がっており、これまでの定常状態が失われつつある段階に入っているということ。

③ 現在の地球は、すでにホメオスタシスの機能を喪失しており、代謝をすることができなくなっているため、地表の熱を外に逃がすことができないという意味で、あたかも人間の体が熱中症になりかけているような状態にあるということ。

④ 現在の地球は、もはや人間の経済活動に起因するさまざまな負荷に耐えられず、特にCO₂の排出はすでにオーバーシュート状態となっているため、超過した熱は地表に滞留しつづけ、地球温暖化の原因になっているということ。

⑤ 現在の地球は、温室効果の進行と経済活動の抑制をうまく相殺することができなくなってしまったために、地表の温度が少しずつ確実に上昇しており、このままでは早晚ティッピング・ポイントを迎えるのは避けられないということ。

問 11 次に示すのは四人の生徒が本文を読んだ後に、その内容について話している場面である。空欄 甲 乙 丙 に入るものの組み合わせとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

生徒 A——本文の冒頭では、いきなり生肉が腐敗するなんて話が出て来たからびっくりしたけれど、それをきっかけに筆者は、代謝について説明しているね。

生徒 B——代謝って、新陳代謝の代謝だよ。言葉は聞いたことがあったけれど、よく知らなかったから、今回の文章は勉強になったよ。

生徒 C——筆者はむしろ、代謝そのものについて論じるというよりも、甲 について論じることを目的として、代謝を取り上げたんじゃないかな。

生徒 D——たしかに、そうだよね。筆者が注目しているのは、乙 だと思う。

生徒 B——それが今、うまくいかなくなっているってことだよ。気候変動や温暖化を考えると、明らかに地球がおかしくなっている感じがするもん。

生徒 A——私もそう思う。夏の暑さとかゲリラ豪雨は異常だし、何かがおかしくなっているよね。

生徒B——これ、元に戻るのかな。そんなことを考えると、本気で心配になってきた。

生徒D——そこが一つのポイントなんじゃないかな。筆者も、地球がティッピング・ポイントを迎えてしまう可能性を指摘しているよ。

生徒C——つまり、この地球の変化が 丙 なものになってしまいうことに警鐘を鳴らしているというわけだね。

生徒B——将来のために、どうにかしなきゃいけないよね。この文章も勉強になったけれど、みんなで話し合うことができてよかったよ。

① 甲Ⅱ地球環境のもつ持続可能性

乙Ⅱ私たちが人間が代謝によってうまくバランスを維持しているように、地球も今ある状態を維持することが大切だという点
丙Ⅱ不可逆的

② 甲Ⅱ地球の四五億年の歴史

乙Ⅱ私たちが免疫によって病原体を撃退するように、地球も自己完結的なシステムを維持しなければならないという点
丙Ⅱ周期的

③ 甲Ⅱ劣化しつつある地球の現状

乙Ⅱ私たちが地球を大切に思うのと同じように、地球もまた人間が生き続ける場であり続けようとしているという点
丙Ⅱ中・長期的

④ 甲Ⅱ今の地球が直面する問題

乙Ⅱ私たちは自分で体調管理ができるけれど、地球はそうはいかないので、人間がどうにかしなければならないという点
丙Ⅱ局所的

⑤ 甲Ⅱ地球環境問題の解決策

乙Ⅱ私たちが生きていくうえで代謝が不可欠なのと同じように、地球も恒常性を維持することが存続の条件となるという点
丙Ⅱ人為的

Ⅱ 次の文章は、「時間は目に見えないので存在しない」という主張に対して、筆者の考えを述べたものである。これを読んで、後の問1～問8に答えなさい。

「百聞は一見にしかず」ということわざは、視覚にくらべて聴覚は認識の手段として精度がはるかに劣るという意味ですが、そもそも視覚はそれほど正確な認識手段でしょうか。存在の認識にかぎって考えましょう。

「見えるものは信じるが、見えないものは信じない」という主張はよく耳にします。でも、それを存在についての主張と解釈すると、(1)かなり極端な結論がでてしまいます。たとえば、ウイルスは目に見えないので存在しないのならば、一昨日までインフルエンザでみじめな思いをしていたのはウイルスのせいだという説明ができなくなります。

これに対して「肉眼では見えないが、顕微鏡で見える」という反論があるかもしれませんが、つまり「肉眼で見えるか顕微鏡で見えれば存在するが、そうでなければ存在しない」という立場からの反論です。でも、ウサギ座の超新星SN2002bjは肉眼でも顕微鏡でも見えません。だからといって存在しないと言え、天文学者から異論がでるのは必至です。

「肉眼で見えるか顕微鏡で見えるか望遠鏡で見えれば存在するが、そうでなければ存在しない」と修正しても、三種類の視覚モードだけに特定しているの、さらなる反例をまねく可能性をおおきくのこしていると言わざるをえません。

では、「肉眼で見えるか、なんらかの科学機器を使って見えれば存在するが、そうでなければ存在しない」とすれば、信憑性しんぴやうのたかい一般化になるでしょうか。いや、それでもまだ、その一般化の後半部分「肉眼で見えず科学機器を使っても見えないならば、存在しない」という主張は、視覚を過大評価しているという批判からのがれられないでしょう。たとえ科学機器によって補強されたとしても、

たとえば、コンパスの針が南北方向を向くのはなぜかの説明には、地球の磁場に言及する必要がありますが、磁場は肉眼で見えないし、顕微鏡や望遠鏡やその他の科学機器を使っても見えません。

もし「時間は、肉眼でも科学機器を使っても見えないので、存在しない」と主張するひとがいたとすれば、そのひとの主張は、見えないという理由で地球の磁場の存在を否定するひとの主張とおなじくらい受け入れがたいでしょう。

とはいえ、(2)磁場と時間の類比は完璧かんぺきではないかもしれません。磁場はある意味で「可視化」できるのに対して、時間の同様な「可視化」は不可能だと思われるからです。北極圏や南極圏でオーロラを見て地球の磁場が「見える」と言えたり、うすいプラスチック板の上にまかれた砂が作る模様を見て、板の下におかれた磁石の磁場が「見える」と言えたりするでしょうが、それにくらべて時間については、地球の磁場に反応

する太陽風プラズマや、磁石の磁場に反応するプラスチック板上の砂に相当するものが見つかりません。

それでも、「時間は存在しない」と心から信じるひとはきわめて少数派にちがいありません。⁽³⁾なぜわたしたちは、いかなる意味でも目に見えず可視化できない時間の存在を否定しないのでしょうか。それに答えるために、まず、知覚による検証のみが、ものの存在を信じる理由ではない、ということに気づくことから始めましょう。

ブラックホールはその性質上、知覚できません。宇宙物理学では「直接観測できない」と言ったほうがより正確でしょう。では、なぜ、わたしたちは、宇宙空間の特定の場所にブラックホールが存在すると結論できるのでしょうか。それは、そのブラックホールがそこに存在することを仮定すれば、周辺の宇宙空間内に生起する直接観測できる現象に、最良の説明をあたえられるからです。

一般に、説明を要する現象があつて、特定の仮説をたてればその現象を説明でき、たてなければその現象の説明ができないか、またはできても質がおとる説明しかできないような状況下では、当の仮説は受けいれるべきだ、という有名な方法的原理があります。「最良の説明への推論」とよばれるこの原理は、科学的探求においてもごくふつうの日常生活においても、意図的または暗黙裡あんもくりにひろく常用されている方法です。

クラウディオス・プトレマイオス（一〇〇頃—一七〇頃）が生存していた頃は、天動説が当時知られていた天文学的現象の「最良の説明」と見なされていましたが、16世紀以降はニコラウス・コペルニクス（一四七三—一五四三）による地動説が「最良の説明」としてひろく提唱され受けいれられています。いかなる説明が「最良の説明」かは時代によってことなつて当然なので、どの仮説が受けいれるに値するかも、時代によってことなるのは不思議ではありません。

天動説対地動説のような A な例とはちがった、もっと日常的な例をあげましょう。火曜日にゆでた卵を、水曜日に食べたならお腹をこわしたとします。なぜお腹をこわしたかの説明として「ゆで卵が腐っていたから」と「ゆで卵を食べるときにウーロン茶を飲みすぎたから」のどちらかを選択しなければならなかったら、もちろん「よりよい説明」を選ぶでしょう。どちらが「よりよい説明」かは当の状況にかんする適切な情報——ゆで卵はどこでどのように保存されていたか、ゆで卵をいくつ食べたのか、ゆで卵を食べたほかのひとはお腹をこわしたか、飲んだウーロン茶の量はいくらか、ウーロン茶がはいっていたボトルは開封後長時間放置されていたか、等々——に E 左右されるでしょう。

とにかく、「最良の説明への推論」なしには、科学も日常生活も E ままならないのは目に見えています。「最良の説明への推論」を追究しないのは、認識主体としての人間にとつて不可能だと言つても過言ではありません。

なので、もし「最良の説明への推論」によつて時間の存在が正当化されるならば、目に見えず可視化できなくても時間は存在する、という立場を安心してとることができるでしょう。

そこでもちあがるのは、もちろん、時間の存在を仮定しなければ最良の説明ができない現象とはなにか、という問いです。

その問いへの答えの第一候補は「物体のうごき」にちがいありません。たとえばアナログ時計の秒針のうごき。文字盤上を「12」から「1」へと進行する秒針のうごきはリアルではないと主張しないかぎり、そのうごきを説明する必要があります。

その説明のために文字盤にかくされた時計内部の精巧なメカニズムの話にはいるまえに、まず、秒針が「12」から「1」へと進行するというのはどういふことか、はっきりさせねばなりません。

秒針が「12」から「1」へと進行するためには、まず秒針が「12」に位置し、そのあとで「1」に位置する必要があります。ここで重要なのは「そのあとで」の部分です。「そのあとで」の「あと」は時間を含意する、すなわち「時間的にあと」という意味にちがいありません。もつと言えば、「そのあとで」は「それより未来に」という意味です。時間がなければ、「あと」も「未来」も「さき」も「過去」もありえないので、秒針が「12」から「1」へと進行するためには時間の存在が必要だということです。

そもそも時計は、アナログだろうがデジタルだろうが、時間をはかる機器だということに注目すれば、さらなる論証ができるかもしれません。すなわち、時間の存在にもとづいてはじめて時計の機能の最良の説明がつくからこそ時計は時間をはかる機器として機能しうるので、時計が時計として機能しているという事実は時間の存在を信じる（ウ）確固とした理由になる、という論証です。

この論証が真に受けいれるに値するかどうか、とくに、論点先どりの誤謬（確立されるべき結論をまえもつて仮定してしまうという誤謬）をおかしていないかどうかは、ここでは論じません。うごきと時間のあいだには密接な関係があり、「うごき」という概念は「時間」という概念なしには意味をなさない、というポイントをおさえて話をすすめましょう。

そのポイントが指摘されるやいなや、「概念的に言って、変化があるところにはかならず時間があるのだ」と主張したくなる読者がいるかもしれません。でも、その主張はまちがっています。「うごき」を「変化」でおきかえているからです。すべてのうごきは変化ですが、すべての変化がうごきなのではありません。

うごきの知覚について、ひとつ、つけたしたいことがあります。五感のうち、外界の存在をもっとも端的に示すのが視覚だという意見には、大多数のひとが **B** するでしょう。そして、その意見はたぶん正しいでしょう。でも、もしそうだとしても、そのほかの四感が外界の存在をしめさない、ということにはもちろんなりません。それどころか、外界のもののうごきの存在を察知するには、ある意味で視覚よりもすぐれた知覚モードがあります。

触覚です。

それをみごとに提示しているのが、イギリスの詩人クリスティーナ・ロセッティ（一八三〇—一八九四）の「風」という詩です（西條八十による一九二一年の和訳）…

誰が風を見たでしょう

ぼくもあなたも見やしない

けれど木の葉をふるわせて

風はとりぬけてゆく

誰が風を見たでしょう

あなたもぼくも見やしない

けれど木立ちが頭をさげて

風はとりすぎてゆく

木の葉や木立ちは目に見えますが、風は目には見えません。けれど肌で感じれば、直接知覚できるのです。

いつも空気にかこまれていても、肉眼でそれは見えません。空気が肌に触れていても、触覚認知はできません。でもその空気がうごいていれば、肌で感じられるでしょう。目には見えなかったとしても。

目には見えない地球の磁場を、オーロラが「可視化」するように、木の葉や木立ちのうごきによって、風も「可視化」されます。その風が磁場とちがうのは、最良の科学的説明への推論によって間接的に要求される磁場にくらべ、触覚でじかに感じられる風の存在はその認知が、直接的だという点です。

視覚が知らせる秒針の、文字盤上でのうごきのような、わたしたちの身体からはなれた、物体のうごきとはことなつて、肌にふれる微風のうごきは、身体が表面がじかにうける、コンタクトの変化のパターン、つまり、わたしたちに物理的に、直接起きるべきことです。⁽⁴⁾ その最良の説明に、時間の存在がいるとしたら、わたしたち自身の物理的な、存在モードの説明に、時間が必要だということです。

（八木沢敬『ときは、ながれない 「時間」の分析哲学』講談社）

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部（ア）～（ウ）の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は

 ～

。

（ア）左右される

- ① 端を発する
- ② 深くかかわる
- ③ 置き換えられる
- ④ 大きく分けられる
- ⑤ 影響を受ける

（イ）ままならない

- ① 期待に応えられない
- ② なかなかはかどらない
- ③ 思ったようにはいかない
- ④ いつまでも終わらない
- ⑤ 立派なものにはならない

（ウ）確固とした

- ① 一貫した
- ② しつかりした
- ③ もつともな
- ④ 明らかな
- ⑤ 定められた

問 2 空欄 A・B を補うのに最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 4・5。

- | | | | | | | |
|---|---|------|------|------|------|------|
| A | 4 | ① 絶大 | ② 大胆 | ③ 大事 | ④ 壮大 | ⑤ 寛大 |
| B | 5 | ① 賛同 | ② 同化 | ③ 同期 | ④ 混同 | ⑤ 帯同 |

問 3 傍線部（1）「かなり極端な結論」とは、具体的にどのようなものであると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 存在すると信じられなければ、目で見えるようにもならない、というもの。
- ② 肉眼では見えないものであっても、顕微鏡ならば見える、というもの。
- ③ 目で見ることのできないものは、存在することにはならない、というもの。
- ④ ウイルスのようなものは目に見えないのに、人間に害を及ぼす、というもの。
- ⑤ ものは存在していても、それを肉眼で見えることはできない、というもの。

問 4 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 他の感覚に取って代わることができるほど、視覚は精確ではない
- ② 存在しないものを見るなんてことは、最初から不可能である
- ③ 存在と非存在を区別することなど、人間の目でできるわけがない
- ④ 肉眼で直接見ることのできる可能性を、原理的に排除できない
- ⑤ 視覚による知覚可能性は、存在の必要条件としては強すぎる

問 5 傍線部（2）「磁場と時間の類比」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 磁場が存在するための前提として時間が必要であると、仮定すること。
- ② 磁場と時間はまったく同じ属性をもち、一体のものであるとみなすこと。
- ③ 磁場のもつ性質が、もう一方の時間にも当てはまるか検討すること。
- ④ 磁場がどのような特性をもつかということを、時間をかけて考えること。
- ⑤ 磁場についていえることが、時間についてもいえると推し量ること。

問 6 傍線部(3)「なぜわたしたちは、いかなる意味でも目に見えず可視化できない時間の存在を否定しないのでしょうか」とあるが、この点について筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 直接観測することができないものであっても、たとえば磁場などのように「最良の説明への推論」によって存在するとみなされるものがある以上、それと同様の手続きによって、時間も存在すると考えるのが、真に科学的な態度である。
- ② 目で見えるということは何かが存在するということの必要条件であるというわけではなく、たとえば物事の「うごき」のように、時間がその現象を説明するための「最良の説明」となるものがある以上、時間は存在すると考えるのが妥当である。
- ③ 科学の世界では「最良の説明への推論」とよばれる原理が存在し、これによって、たとえば地動説も最良の説明としてその存在が認められてきたので、同じように、「うごき」に関する最良の説明である時間も、科学的に存在すると認めるべきである。
- ④ 何かが存在するということを証明するためには可視化できることが条件であると思われがちだが、決してそのようなことはなく、たとえば観念や概念のような目で見ることができないものも存在する以上、同様に時間も存在するのである。
- ⑤ たとえばブラックホールや磁場などと同じように可視化が不可能であるということは、時間の存在を証明するうえではさして重要ではなく、時間をかけなければものが「変化」することはあり得ない以上、それは存在するとみなされる。

問 7 傍線部(4)「その最良の説明に、時間の存在がいる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 誰も見たことのない風のうごきを、詩は絶妙な表現をもって説明しようとする。その表現はいずれもわたしたちの身体感覚にもとづくと同じに、時間を前提としているということ。

② 地球の磁場とはことなり、空気のうごきである風を可視化し、説明することはできない。しかし、それはわたしたちの身体に直接働きかけ、そのとき人は時間の存在を感じるということ。

③ 風は木の葉や木立ちをうごかし、わたしたちはそれを直接目で見ることができる。このようなかたちで可視化された現象を説明するためにこそ、時間は存在するということ。

④ わたしたちは風を目で見ることはできないが、そのうごきを肌で直接感じることができる。そのような身体的な実感を説明するためにも、時間は存在すると推論されるということ。

⑤ 空気のうごきでしかない風をわたしたちは見ることはできないが、身体で感じとることはできる。そのとき、わたしたちは自身もまた時間的な存在であることを深く思い知るということ。

問 8 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

15。

ア 日常的な場面でもわたしたちは「よりよい説明」を好む傾向があり、そのために科学においても、説明を要する現象がある場合には、可能な限り論理的な飛躍のない最良の説明を求めることになる。

イ 「百聞は一見にしかず」ということわざは、人間の視覚の限界を端的に表現したものであり、私たちが「見えるものは信じるが、見えないものは信じない」という錯誤に陥りやすいことを示唆している。

ウ 肉眼では見えなくても、なんらかの科学機器を用いて見ることができればそれは存在すると言えるという主張を根拠として、目で知覚することのできない時間は存在しないと判断することはできない。

エ わたしたちの身体に直接触れ、感覚することのできる現象が時間の存在を前提としているのであるならば、わたしたち自身の物理的な存在のモードを説明するのにも、時間の存在が必要だということになる。

オ 「最良の説明への推論」とよばれる原理は、本来は科学において有効とされるものであったが、今ではわたしたちの日常においても、類比

的にものごとをとらえる場合に用いられることがある。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問 1～問 11 に答えなさい。

モノからコトへと価値観が拡大し変化してきた結果、以前よりもモノのクオリティが問われなくなってきたことは事実である。コト性が重視されてきた結果、周りを見渡すと、仕組みとしての価値は評価されているが、「モノの質」は決して高くないものも少なくない。A、そうしたものが、社会的には非常に高い評価を受けることもしばしば起きている。私たちは、② 徐々にモノをみる目を失いつつあるようにさえ感じる。モノの中にある質や美、つまりはハードウェア・デザインとしてのクオリティを失ったとき、その生活は真の豊かさとはいえないだろう。

ビジネスシーンにおいても、ハードウェアの価値が高くなるとは、イノベータータイプな仕組みやビジネスも評価されない。そのことは、Apple 製品などを見ても明らかであり、① ハードウェア自体の価値が高いことによって、初めて事業の成功が約束される。

車やモーターサイクルを愛する人々が、自身の所有するマシンを愛でて楽しむといった「所有の喜び」は時代とともに変化しつつも、決して失われることはないだろう。美しいものに対する欲求や憧れは、いつの時代も変わることはない。ハードウェアの復権は、生活文化の復権といってもよい。これは、極めて重要な認識だ。

もちろん、価値認識が所有から使用へと移り変わり、様々な物がシェアされる時代となって変化は起きている。しかし、自身が所有している物でないからといって、ただ単に機能を満たせばよいと考えられるのだろうか。シェアされるモノであっても、X はずだ。所有する喜びから使用する喜びへと社会が変わっても、その楽しみ方が変わるだけではないか。生活の中で、「美しさや品質」への追求を失ってしまうとは、文化も失われるということではないだろうか。

「そもそも〇〇とは何か」という、そのモノの本質を考えたとき、モノの姿は自ずと「本質的な美」にたどり着くように思う。これこそが、私たちがデザインと向き合う上で、常に目指してきたものである。【①】 美は、生活者にとっての「生活の品質」を支え、企業にとっての「アイデンティティ」を創造し、「文化をかたちづくる」ことにつながる。

モノづくり文化としての「ハードウェアの復権」は、創り手と使い手の「心」の復権でもある。工芸作家は自らの「魂」を込めて作品を創り、それを使い手にわたす。そのとき、精神の共振現象が起こり、使い手に感動が生まれる。作者の思いを、受け手が感じ取ったとき、人は一つの茶器の中にも宇宙を見ることが出来る。

今日のインダストリアルデザインにおいて、デザイナーとユーザーの間に、② このような芸術的な関係性は難しいかもしれない。しかし、デ

デザイナーは産業人であると同時に、文化人でもなくてはならないだろう。モノづくりの社会的関係性の中で、デザイナーは忘れることのできない価値に目を向ける。それは、かつて^(注1) ウイリアム・モリスが提唱した「アーツ・アンド・クラフツ運動」を思い出す。決してこれはアナクロニズムなどではない。B、モノに「心」を映すデザイナーの本来性であると思えてならないのだ。

過去から現在、そして未来につながるデザインの立ち位置を確認する上で、「モノ」「コト」「テクノロジー」の先に問い直すべきが「心」ではないだろうか。【②】「心」は、モノづくりの精神や感動創造から、倫理性や人類愛までその幅は広く奥が深い。

2045年にはAIの能力が人間を上回ると予想されている。それはシンギュラリティ(技術的特異点)と呼ばれる、その兆しはすでに色々な生活の場で見え始めている。AIはビッグデータと結びつき、あらゆる事象の最適解を導き出すとしている。【③】ビッグデータとAIは、これまで人間の多大な労力によってつくられてきた仮説を、一瞬にしてつくりあげてしまう。それは、人間よりも遥かに高度な分析により、新たな関係性を見出すだろう。こうしたことは、デザインの世界にも大きな影響を与える。C、デザインは「仮説を提示すること」が大

変重要な役割であるが、ビッグデータとAIもまた仮説を提示することを得意とするからだ。今後、様々な問題解決や戦略構築、未来予測に新しい世界が拓かれていくはずだ。

【③】そうした時代のデザインは、テクノロジーが全てを支配するようになるのだろうか。いや、私たちは一点だけ重要なことを忘れてはならない。それは、「AIやビッグデータは心を持たない」ということだ。AIが得意とすることは、膨大なデータの中から、特徴的な傾向を読み取り、それが次に何を起こすのかを予測すること。これまでの人間の労力では、到底達成することができない複雑な分析だ。AIとビッグデータの役割は素晴らしいものだが、それはあくまでも過去に起こったことに対する詳細な推論に過ぎない。「ビッグデータとAI」はゴッホのような絵を描くことも、川端康成のような小説を書くこともできるかもしれない。しかし、真に全く新しい芸術を生み出すことができるかは疑問だ。今、私たちは、デザインにおいても新たなツールを積極的に活用することに疑いはない。しかし一方で、Y。

今も昔も、そしてこれからも、デザインは、「より良い人々の暮らしと世界を創る行為」であることに変わりはない。だからこそ、自らの「心」に基づいた創造的な仮説を提示していくことが、ますます重要になっていくに違いない。私はその時、これまで以上に「モノ・コト・テクノロジー」が「心」を支え、新たな価値を生み出すような関係になっていくのではないか。いや、むしろそうでなくては真に人のための社会とはいえないだろう。

「モノ」と「心」が結びついたときを考えると、そこにはモノに接する「感動や喜び」が生まれることが分かる。【④】モノづくりにおけ

る「心」の復権である。このことは先に述べたとおりである。

では、「コト」と「心」の結びつきとは何だろう。それは、様々な人のための仕組みやサービスが、「心」をもって作られたときに、人々の共感や、喜びや、心の安寧がもたらされるということだろう。それは「祭り」のようなものであったり、「福祉」のようなものであったり、D「政治」そのものかもしれない。そして、「テクノロジー」と「心」の結びつきの先には、人間を中心とした様々な社会インフラや生活サポートが登場する。それは、人の世界に安心や安全をもたらし、より便利な社会システムが生活総体として快適性を生み出すに違いない。それは、日常生活の様々な行動を支える衣食住から、交通やエネルギーなどのインフラまで、多様な社会基盤が高度な情報の上に成り立っているのだろう。そして、何よりも⁽⁴⁾それは、「人のためのテクノロジー」でなくてはならない。このように「心」には、個人の内面に深く根差した「エモーショナルな心」と、社会的倫理性に基づく「^(注2)エシカルな心」の両面がある。【⑤】今日のデザインを行うにあたって、この両面においてデザインに「心」を取り戻していかなくてはならないだろう。

社会全体に対するデザインが「心」を持ったとき、「心」を通じたその先に新たな価値が生まれる。それが、我々が言うところの「Essential Values」の最も大切な姿であると考えている。「モノに心あり」とした^(注3)GKの思想を背景とし、モノゴトの本質をデザインしようとしたとき、必ずそこには「心」があるはずだ。デザインに「心」が必要ということは、文化としてのデザインを取り戻すということでもある。「心」を中心にデザインを考えなくては、次なる時代は到来しないだろう。

これは、ビジネスを考えることにおいても同様である。今日のSDGsが、単にエシカルなポーズとしてではなく、ビジネスと社会正義が結びついたものとして認識されているように、「心」とビジネスが結びつく時代が必ず到来する。デザインに社会性が求められると同時に、人間性の復権が求められる現在において、「心」が含まれていないビジネスに果たしてどれほどの価値があるといえるだろうか。

21世紀という言葉が、「未来」という輝きを^(注4)失って久しい。しかし「心」と「デザイン」が結びついた社会こそが、かつて望んでいた真の未来ではないだろうか。私たちは、「モノ・コト・テクノロジー」の先に、「心」とのつながりを持つことが不可欠であり、^(注5)それこそが「デザインの本質」を生み出す正しい姿だと信じている。

（田中一雄『デザインの本質』ライフデザインブックス）

（注1）ウィリアム・モリス——イギリスのテキスタイルデザイナー（一八三四—一八九六）。「アーツ・アンド・クラフツ運動」を主導し、中世的な手仕事を再興することによって生活と芸術を統一することを目指した。

（注2） エシカル——倫理的な。

（注3） G K——筆者が代表を務める、株式会社G Kデザイン機構を指す。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部（ア）～（ウ）の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は

1

 ～

3

。

（ア）徐々に

1

- ① 加速度的に
- ② 劇的に
- ③ 漸進的に
- ④ 近視眼的に
- ⑤ 断続的に

（イ）到底

2

- ① どのようにしても
- ② だれが見ても
- ③ いままでたつても
- ④ 一部であつても
- ⑤ どれをとつても

（ウ）失って久しい

3

- ① 失っていくのかもしれない
- ② だんだんと失いつつある
- ③ 失ったとしてもかまわない
- ④ 失ってから長い時がたつ
- ⑤ いつの間にか失うことになる

問 2 空欄 A 〓 D を補うのに最も適当な言葉を、次の①〓⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は A・4、B・5、C・6、D・7。

- ① なぜならば ② しかし ③ あるいは ④ むしろ ⑤ では

問 3 傍線部（1）「ハードウェア自体の価値が高いことによって、初めて事業の成功が約束される」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① ビジネスが成功を収めるためには、ハードウェアがモノとして質の高いものであることが前提となる、ということ。
 ② ビジネスが成功しなければ、ハードウェアのモノとしての質はいつまでも高いものにならない、ということ。
 ③ ビジネスが成功するということは、そのビジネス自体が質の高いハードウェアであることを意味する、ということ。
 ④ ビジネスが成功したとしても、ハードウェアのモノとしての質が高いものでなければ意味がない、ということ。
 ⑤ ビジネスが成功するための要諦は、質の高いハードウェアを所有する喜びを生み出す点にある、ということ。

問 4 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 以前と同じような「所有の喜び」を感じることができる
 ② 代替不可能な「コト」の価値を見いだすことが可能である
 ③ 優れた「モノの質」に触れたときの感動は存在し続ける
 ④ 「テクノロジー」の素晴らしさがひしひしと伝わってくる
 ⑤ 企業の「アイデンティティ」がしっかりと表れている

問 5 傍線部（2）「このような芸術的な関係性は難しいかもしれない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 10。

- ① 現在はインダストリアルデザインにおいても、「ハードウェアの復権」といわれる現象が起きており、モノには芸術性よりもハードウェアとしての実用性の高さが求められているから。
- ② モノよりもコトが重視されるようになった現在の風潮の中で、ユーザーはモノに「本質的な美」を求めなくなり、デザイナーもそれに応じて、「生活の品質」を優先するようになってきているから。
- ③ かつてデザイナーは自らの魂を込めて作品を創り、それを受け取ったユーザーは作品に精神の深淵を感じたものであるが、今ではモノづくりの大部分がAIによって代替されているから。
- ④ 今では社会の価値観がモノからコトへと移り、モノのクオリティが以前ほど問われなくなってしまったので、デザイナーはモノに「心」を映し出すことをしなくなってしまったから。
- ⑤ 価値認識が所有から使用へと変化し、様々なモノがシェアされるようになると、ユーザーの「所有の喜び」は失われ、代わって生活の中の「美しさや品質」が問われることになるから。

問6 傍線部(3)「そうした時代のデザインは、テクノロジーが全てを支配するようになるのだろうか」とあるが、この点について筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 11。

- ① AIやビッグデータは、複雑な分析や詳細な予想をすることはできるが「心」を持たず、それだけでは創造的な活動をすることはできないので、テクノロジーが全てを支配するようにはならない。
- ② AIはビッグデータをもとに最適解を導き出すことには秀でているが、複雑な人間の「心」を読み解くことはできないので、テクノロジーが全てを支配するようにはあり得ない。
- ③ AIはビッグデータと結びつき、様々な問題解決や未来予測を可能にしているが、それが「心」を持つ人間に受け入れられるとは限らないので、テクノロジーが全てを支配するようにはならない。
- ④ AIやビッグデータは「心」を持たず、倫理性や人類愛といった抽象的な問題について最適解を導き出すことは不可能なので、テクノロジー

ーが全てを支配するようになることは絶対でない。

- ⑤ AIはビッグデータを活用し、「モノ」の領域では力を発揮するが、人間の「心」のような「コト」を扱うのは不得手なので、テクノロジーが全てを支配するようになるとは考えにくい。

問 7 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 12。

- ① やがてシンギュラリティが訪れることも忘れてはならない
② いかにも賢くAIを使いこなすかを検討する必要がある
③ いたずらに人間性を求めるようなことはあってはならない
④ 価値を創造することに対しては慎重さが求められる
⑤ 人間にしかできないことを深く考えなくてはならない

問 8 傍線部（4）「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 13。

- ① 「祭り」のようなもの
② 社会インフラや生活サポート
③ 生活総体
④ 日常生活の様々な行動
⑤ 高度な情報

問 9 傍線部（5）「それこそが『デザインの本質』を生み出す正しい姿だと信じている」とあるが、筆者は「デザインの本質」についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 14。

① デザインとは、ハードウェアの価値を高めるために行われる文化的行為であるが、それは人々に「感動や喜び」を与えるだけでなく、ビジネスにおいて新たな価値を創り、SDGsにも寄与するものでなければならない。

② デザインとは、「心」を持ったデザイナーによってなされる創造的な行為であり、それはより高いクオリティの生活を実現することを目的とするが、今後は社会から要請される倫理性をそなえるものになっていかなければならない。

③ デザインとは、「モノ・コト・テクノロジー」を有機的に結合させることを目的として行われるものであるが、そのためにはまず、モノのデザインが「心」と結びつき、「所有の喜び」を生み出すものでなければならない。

④ デザインとは、新たな価値を創造することを通じて世界と生活をより豊かなものにするために行われるべきものであるが、その意味ではまず、「心」とのつながりを回復し、社会正義にかなったものへと生まれ変わらなければならない。

⑤ デザインとは、人々の暮らしとこの世界をより良いものにすることを第一義とする行為であるが、そのためには「心」とつながりを持ち、社会倫理のみならずビジネスにおいても、新たな価値を創造するものでなければならない。

問10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。 解答番号は

15

。

【それは間違いなく大きな変化だ。】

問11 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。 解答番号は

16

。

ア

20

何を所有するかということにより、個人のアイデンティティは決定される。

イ デザインで必要とされる「心」とは、ビジネスにおける倫理性そのものである。

ウ 所有から使用へと価値認識が変わっても、美しいものを求める人の心は変わらない。

エ モノのデザインやクオリティは、ビジネスの価値や成功とも無関係ではない。

オ 人間中心の社会システムが成立して、初めて「テクノロジー」と「心」は結びつく。

20

19

18

17

16
